

令和五年度入学試験問題 国語 問題用紙

(一) 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えなさい。

パン食い競走、スプーン・リレー、大玉転がし、二人三脚、騎馬戦、棒倒し、フォークダンス、仮装行列……。A運動会とは、じつに奇妙なスポーツ・イベントである。こんな奇妙なスポーツ・イベントが学校や企業や地域(町内)で行われているのは日本だけである。

I、第二次世界大戦中に日本に占領された南洋諸島では、この「奇妙なイベント」が、いまも行われている地域があるという。また、アメリカやヨーロッパに進出した日本企業が、労働者の親睦とレクリエーションのために運動会を開催し、現地のひとびとに好評を博しているとも聞く。それは、運動会が、どんな国のひとびとにも楽しむことのできる、すばらしいスポーツ・イベントだから、というほかない。

この奇妙で、すばらしいイベントを創り出したのは、明治の日本人だった。

運動会とは、タテマエとして遊ぶことを隠したが、富国強兵と殖産興業で遊ぶことを否定された時代に、本当は遊ぶことが大好きな日本人が、からだの底から湧き出す本性によって創り出した、すばらしいスポーツ・イベントだったのだ。

日本で最初に催された運動会は、1874(明治7)年、東京・築地の海軍兵学校(ア)スレチック・スポーツで催された「競闘遊戯会」だとされている。イギリス人教官の指導のもとに行われたこの大会は、競技会であると同時にレクリエーション性の高いもので、当時の「遊戯番付」には、徒競走や(ア)チョウヤク以外に、豚の尻尾をつかんで走る競走があったり、また、(三百ヤードノ距離ヲ限リテ見物人ニ競走セシムルコト)という見物客の参加する種目もくわえられている。1878(明治11)年に札幌農学校(のちの北海道大学)で行われた「力芸会」と名付けられた運動会では、二人三脚、障害物競走、食菓競走(パン食い競走)といった、のちに運動会特有の種目となるゲームが早くも行われている。

そのように運動会が、日本で誕生した当初から「遊び」(レクリエーション)の要素の強いものとなったのは、「スポーツ」という外来語に、まだ翻訳が定まらず、「遊戯」「娯楽」「力芸」(さらに「戯れ」「冗談」「遊獵」「釣漁」「競馬」等)の訳語が自由に用いられていた、という事情があった。それらの訳語は、「スポーツ」という言葉の本来の字義にかなうものであり、明治の文明開化でスポーツという(イ)ハクライ文化に接した日本人は、まず、スポーツを本来の意味でのおりの「遊び」と素直に解釈し、「遊戯会」や「力芸会」(のちの運動会)に、自由自在に「遊び」の要素をくわえたのだった。

ところが、1885(明治18)年から、東京帝国大学で「運動会」と名付けられたスポーツ・イベントが開催されるようになる。これは、今日の陸上競技

のトラック競技とフィールド競技の主な種目が(ウ)モウラされたもので、明治政府の富国強兵、殖産興業という方針に沿って、「スポーツ」を「運動」または「体育」と翻訳(解釈)した結果といえる。

II は、小説『三四郎』のなかで、この東京帝国大学の「運動会」を詳しく描写している。が、(ながとび)「長飛」(走り幅跳び)や(うちな)「槌投げ」(ハンマー投げ)を見て、何も面白いと思えない主人公の思いを通して、(わいわい)「運動会」は各自勝手に開くべきものである。人に見せべきものではない。あんなものを熱心に見物する女は(こぼれ)「悉く間違つて」と書いている。それは、最新の文明(スポーツ)を理解できない田舎者の三四郎と、それを楽しんでいる近代女性の美禰子の対比を示すシーンだが、(運動会)は各自勝手に開くべきもの」という一文は、II が「運動会」に国策(富国強兵)の臭いを嗅ぎとり、批判したものの、ともいえる。

東京帝国大学で身体鍛錬発表の場としての「運動会」がはじめて開催された年、文部大臣に就任した森有礼は、児童生徒の集団訓練と体位向上を目的に、運動会の開催を奨励する文部省令を發布した。それをきっかけに、全国の小中学校、(エ)シハン 学校で運動会が開催されるようになったのだが、Bその中味は森文部大臣の意図した方向から見事に離れていった。

1872 (明治5)年に学制が定められて、まだ10年余り。当時の日本の学校は、就学率も低く、一校あたりの生徒数も少なく、農繁期になると学校を休む児童生徒も多く、また運動場等の施設もなく、とても運動会など開ける状態になかった。そこで、いくつかの学校が集まって「連合運動会」を開催することになった。その場所として、寺社の境内、河原や雑草地(地域の共有地)などが選ばれた。そこで、檀家や氏子、地域住民の支援が必要となり、彼らの参加できる種目を取り入れることになり、パン食い競争や豚追い競争といった「遊戯会」「力芸会」の種目が入れられるようになった。

さらに、「連合運動会」の会場は、多くの児童生徒や父兄にとつて遠く離れた距離になる場合が多く、「遠足」の要素がくわり、母親は弁当をこしらえる必要に迫られた。また、寺社の境内を使ってイベントを催すのなら、夏祭りや秋祭りの一環として開催しようとの声があがり、会場の中央に櫓を組み、運動会で盆踊りや豊年満作踊りを踊るようになり、母親のこしらえる弁当は、「祭り」にふさわしい豪華さを備えるようになった。

それと同じ時期、自由民権運動が全国的な規模での盛りあがりを見せた。が、新聞紙条例、集会条例、治安警察法、(ざんぼうりつ)「讒謗律」といった明治政府の弾圧によって、自由民権の壮士たちは集会を開くことができなくなった。そこで彼らが目を付けたのが運動会だった。

明治政府の弾圧によって、自由に集会を開くことができなくなった自由民権運動の志士たちは、「壮士運動会」と称する運動会を開催した。

そして、「庄政棒倒し」「自由の旗奪い合い」「政権争奪騎馬戦」といった新たな種目を創造し、運動会のなかで、自らの主張を展開した。さらに、仮装をしてデモンストレーションを行ったり、簡単な芝居を演じたりするなかで、薩長藩閥内閣打倒、民選議院設立等の政治的主張を訴えた。それが今日の運動会における仮装行列のルーツである。

自由民権運動の一環としてはじまった「壮士運動会」と、文部省の意図に反して地域住民を巻き込んだ「祭り」に発展した「連合運動会」——その2つが合わさって、今日の運動会へと発展したのだ。

今日でも、幼稚園や学校の運動会の前夜となると、母親は腕によりをかけて豪華な弁当をつくらうとする。それは「祭り」だからであり、フォークダンスは盆踊りの名残（戦後ヴァージョン）であり、棒倒しや騎馬戦や仮装行列のルーツは自由民権運動だったのだ。

最近の学校の運動会では、昼食を子供だけ教室で食べさせたり、棒倒しは危険だからといって禁止したり、仮装行列はスポーツと関係ないという理由で廃止したりする。それらは、日本人の（オ）ハッキした「遊びの創造力」を否定する行為といえよう。

戦争中の1944（昭和19）年、津軽最北端の小漁村（小泊港）で国民学校の運動会を見た太宰治は、次のように書いている。へまず、万国旗。着飾った娘たち。あちこちに白昼の酔っぱらい。そうして運動場の周囲には、百に近い掛小屋がぎっしりと立ちならび（略）、それぞれの家族が重箱をひろげ、大人は酒を飲み、子供と女は、ごはん食べながら、大陽気で語り笑っているのである。日本は、ありがたい国だと、つくづく思った。たしかに、日出する国だと思った。国運を賭しての大戦争のさいちゅうでも、本州の北端の寒村で、このように明るく不思議な大宴会が催されている。古代の神々の豪放な笑いと闊達な舞踏をこの本州の僻陬に於いて直接に見聞する思いであった。

このような「祭り」の光景は、今日、ワールドカップ・サッカーやオリンピックやF1グランプリといったスポーツのビッグ・イベント（の舞台裏）で見ることができるといえる。

先に引用した II が『三四郎』で批判した東京帝国大学の「運動会」とは対照的に、日本全国に広がった庶民レベル、地域レベルの運動会は、文化としての「スポーツ」の本義を具現化したイベントといえるのである。そのようなスポーツ・イベントの創造を可能にしたのは、日本にまたC共同体が残されていたからだろう。が、逆に、共同体の崩壊した今日では、スポーツが求心力となり、新たな共同体を創り出せるか否かが問われている。

（玉木正之『スポーツとは何か』より、一部改変。）

問1 傍線部ア～オのカタカナを漢字に直して書きなさい。

- (ア) チョウヤク (イ) ハクライ (ウ) モウラ (エ) シハン (オ) ハツキ

問2

I

に当てはまる語句として最も適当なものを、次の①～⑤から一つ選び、記号で書きなさい。

- ① ただし
② すなわち
③ しかし
④ さらに
⑤ 一方

問3

II

に当てはまる人物の姓名を書きなさい。

問4 傍線部A「運動会とは、じつに奇妙なスポーツ・イベント」とあるが、なぜ筆者は「奇妙」と言っているのか、四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問5 傍線部B「その中味は森文部大臣の意図した方向から見事に離れていった」とはどういうことか。森文部大臣が意図しなかったこと具体例を挙げながら、簡潔に説明しなさい。

問6 傍線部C「共同体」とあるが、この「共同体」を構成しているものの具体例を、本文中から二つ抜き出して書きなさい。

(二) 次の文章を読んで、後の問い(問1〜5)に答えなさい。

ちようど今から二十四年前の夏休みに、ただ一度ケーベル^キさんに会って話をした記憶がある。Aほんとうに夢のような記憶である。

それは私が大学の一年から二年に移るときの夏休みであった。その年の春から私は西片町^{じかたまち}に小さな家を借りてそこに自分の家庭というものを作った。それでもいつもはきまつて帰省する暑中休暇をその年はじめてどこへも行かずにずっと東京で暮らす事になった。長い休暇の所在なさを紛らす一つの仕事として私はヴァイオリンのひとり稽古をやっていた。その以前から持つてはいたが下宿住まいではとかく都合のよくないためにほとんど手に触れずにしまい込んであったのを取り出して鳴らしていたのである。もつともだれに教わるのでもなく全くの独習で、ただ教則本のようなものを相手にして、ともかくも音を出すまねをしていたに過ぎなかった。適当な教師があれば教わりたかったが、そういう方面に少しの(ア)エンコももたなかったし、またあつたにしてもめつたな人からは教わりたくもなかった。それでやっぱりいろんな書物にかいてあるひき方を讀んでは、ひとりてくふうしながら稽古していた。いつまでもろくな音は出なかったが、それでもそうする事自身に人知れぬ興味はあつた。

適当な楽譜を得るためにははじめには銀座へんの大きな楽器店へ捜しに行ったが、そういう商店はなんとなくお役所のように気位が高いというのか横風^{おうふう}だといふのか、ともかくも自分には気が引けるようでも不愉快であつたから、おしまいには横浜のドーリングとかいう商会へ手紙で聞き合したり注文したりする事にしていた。これは全くの余談であるが、少なくともそのころ、私は音楽が好きであるにかかわらず、音楽に関係している人々からはよい印象を受けなかつた。音楽家からも楽器屋の店員からも、また音楽好きの学生からも一つとしてよい印象を受けなかつた。

そのころ音楽会と言へば、音楽学校の卒業式の演奏会が唯一の呼び物になつたがこれは自分らには入場の自由が得られなかつた。そのほかには明治音楽会と云うのがあつて、このほうは切符を買つてはいる事ができた。半分は管弦楽を主とした洋楽で他の半分は邦楽であつた。そのほかにも何かの(イ)ジゼン^{ジゼン}音楽会というようなものもあつて、そんなおりに私にとっては全く耳新しかったいろいろのソロなどを聞く事もできた。

記憶が混雑して確かな事は言われないが、たぶんそういう種類の演奏会のどれかで私は始めてケーベルさんの顔を見、ケーベルさんのピアノの独奏を聞いたように思う。曲がどういふ曲であつたかそれも覚えていない。ただ覚えていゝのは、ケーベルさんが一曲の演奏を終わつて、静かに横にからだを向けて、椅子に腰かけたままじつと耳をすまして楽器と天井の間に往復する音波^{ソウアーベレーション}の反響^{ソウアーベレーション}に聞き入つていた瞬間の姿である。聴衆は待ち(ウ)カ^カねていたように拍手をした。ケーベルさんが立ち上がるのも待たないで無遠慮に拍手を浴びせかけた。ケーベルさんは少しはにかんだような色(エ)ニ^ニユウワ^{ユウワ}な顔に浮かべて聴衆に挨拶した。

演奏していた時の様子も思い出す。少し背中を猫背に曲げて、時々仰向いたり、軽くからだを前後に動かしたりしているのがいかにも自由な心持ちでそして三味にはいつているようなふうに見えた。他の多くの演奏者と対比した時にいつそう何かしら全くちがったいい感じがした。

まっ黒なピアノに対して童顔金髪の色彩の感じも非常に上品であったが、しかしそれよりもこの人の内側から放射する何物かがひどく私を動かした。

平たく言えば私はその時から全くケーベルさんが好きになったのであった。もつともその前からその人がらについて十分な予備知識はもっていたのであるが、一度会って話がしてみたかった。しかしなんの用もないのに無紹介で訪問するのはあまりにぶしつけだと思つて控えていた。

夏休みにヴァイオリンをもてあそんでいるうちにも、私の頭の中のどこかにケーベルさんの顔が浮かんでいたものと見える。どうしたはずみであったか、とうとう私はケーベルさんに手紙を書いた。理科の一年生だが音楽の修業の事で教えていただきたい事があるから、お暇の時に面会を許してくださいというような事をかいたものらしい。

返事をもらう事ができるかどうかと危ぶんでいる間もないほどに早く返事が来た。何日の何時に来いというのであった。それがどんなに私を喜ばせ（オ）コウ
フンさせたかは言うまでもない。

約束の日に白山御殿町のケーベルさんの家を探して植物園の裏手をうろついて歩いた。かなり暑い日で近辺の森からは蝉せみの音が降るように聞こえていたと思
う。

若い男の西洋人が取り次ぎに出た。書齋のような所へ通されると、すぐにケーベルさんが出て来た。上着もチョッキも着ないで、ワイシャツのまま出て来た。そしていきなり大きな葉巻き煙草を出して自分にも吸いつけ私にもすすめた。

ドイツ語は少しも話せず、英語もきわめてまづかった私がどんな話をしたかほとんど全く覚えていない。ただ私がヴァイオリンを独習している事を話した時に、ケーベルさんは私のもっている楽器の値段を聞いた。それが九円のヴァイオリンである事を話したら、ケーベルさんは突然吹き出して大きな声でさもおもしろそうに笑った。私はそれがなぜそれほどおかしい事であるかをその時には充分理解する事ができなかった。それにもかかわらず私は笑われても別に不愉快でなかった。かえっていかにも罪のない子供のような笑いにすり込まれて私もわけもなく笑ってしまったのであった。

次の室へやの棚の上にオルゴールのような楽器が置いてあった。それを鳴らして聞かしてくれたりした。

その時の話の結果として、ケーベルさんは私のためにある音楽家に紹介状を書いてくれた。それは結局断わられて無効になってしまった。そうして私はとうとう二十年後の今日まで、ほんとうの楽器の扱い方を知らずに過ごして来た。

しかし私がケーベルさんを尋ねた第一の動機は、今になってみると、ヴァイオリンの問題よりはやはりむしろケーベルさんに会う事であつたらしく思われる。考えてみるとB恥ずかしい事である。その時に私は二十三歳であつた。ケーベルさんもまだそう老人というほどでもなかった。

それきりで私は二度と会って話をした事はない。ただその後一度駿河台の家へ何かの演奏会の切符をもらいに行った事がある。その時は今の深田博士が玄関へ出て来て切符を渡してくれた事を覚えている。これもC恥ずかしい事である。その家の門の表札にはラファエル・フォン・コウイベルとしてあった。全く夢のようである。

言葉がもう少し自由であったなら、そして自分も文科の学生でもあったら、私はおそらく、もう少しケーベルさんに接近する機会が多かったかもしれない。

ケーベルさんがなくなった時に私は昔の事を思い出してせめて葬式にでも出たいような心持ちがした。しかしやっぱりそうしないほうがいいと思ってやめてしまった。どこへ見舞い状を出す先もないと思う事がさびしかった。

自分のような、みずから求めて世間に義理を欠いて孤独な生活を送りながら、それでいて悟りきれずに苦しんでいるあわれな人間にとっては、ケーベルさんのような人が、どこかの領事館の一室にこもったきりで読書と思索にふけているという考えだけでもどんなに大きな慰藉であったかしのびないと思う。その人がもうこの世にいないと思うのは、なんだか少しさびしい。

ケーベルさんに笑われた九円のヴァイオリンは、とうの昔にこわれてしまったが、このごろ思い出してまた昔の教則本をさらっている。それにつけて時おりはあの当事を思い出す。そうすると、Dきつと蝉時雨の降る植物園の森の裏手の古びたペンキ塗りの洋館がほんとうに夢のように記憶に浮かんで来る。

(寺田寅彦「二十四年前」『寺田寅彦隨筆集第二卷』より、一部改変。)

注1 ケーベル……Raphael Koerber (1848~1923)。ロシア生まれの哲学者。明治二十六年(1938)東京帝国大学の教師となり、哲学の他ギリシア語

ラテン語、ドイツ語などを教え、また東京音楽学校でピアノを教えたこともある。日本で死んだ。

注2 深田博士……深田康算(1878~1927)。ケーベル門下の美学者。京都大学教授。

問1 傍線部ア)オのカタカナを漢字に直して書きなさい。

- (ア) エンコ (イ) ジゼン (ウ) カねて (エ) ニュウワ (オ) コウフン

問2 傍線部D「きつと」が表す意味として最も適当なものを、次の①～⑤から一つ選び、記号で書きなさい。

- ① 瞬間的に集中して行なわれるさま。
- ② ある事柄について、自分の推測が確実であると信ずるさま。
- ③ ある動作を行う、またはある状態であることが確実なさま。
- ④ 相手に必ずこうしてほしいと要望するさま。
- ⑤ けわしい気持ちを表した顔つきになるさま。

問3 傍線部A「ほんとうに夢のような記憶である」とあるが、なぜ筆者は「夢のような記憶」と言っているのか、五十字以上六十文字以内で説明しなさい。

問4 傍線部B・C「恥ずかしい事である」とあるが、筆者の「恥ずかしい」という気持ちが文法的に表れている箇所のうち二つを、本文中から八字以上十五字以内で抜き出して書きなさい。

問5 傍線部B・C「恥ずかしい事である」とあるが、なぜ筆者は「恥ずかしい」と言っているのか、簡潔に説明しなさい。

